

姫路市の地域連携の取り組みと心理士が果たす役割

ー福祉と保育の連携：発達支援コーディネーター研修の取り組みを通してー

姫路市総合福祉通園センター 発達相談室
臨床心理士 黒田知沙 木田裕子 奥村由紀

【はじめに】

姫路市では、平成8年に保育所障害児巡回相談事業（以下、巡回相談）を開始し（市保育課（当時）と当センターでの共同事業）、年に1～2回市立保育所を訪問し、いわゆる『ちょっと気になる子』の行動観察及び保育士の相談対応の場を持ってきた。そのことにより、その子どもへの理解が深まり支援の工夫が行われる一方で巡回相談の対象として挙げられる子どもの数は年々増加し、1人の子どもに対する理解と支援が他の子どもへの理解と支援につながるような連携体制の構築が次の課題となった。

そこで、姫路市では平成25年に市立保育所・こども園（以下、所・園）の中で特別支援の中心的役割を担う存在として発達支援コーディネーター（以下、コーディネーター）が設置された。

その翌年から実施しているコーディネーター研修は、市こども保育課と当センターが連携し、コーディネーターを対象に、①現場研修（公開保育の中で1人の子どもの行動観察を行い、その後対象児についてのケース会議を実施する）、②コーディネーター会議（コーディネーターと市内の乳幼児に関わる施設等の職員が参加。各施設の取り組みについて情報交換を行う）、③学習会を実施している。こういった連携が所・園での子どもへの対応の変化につながったことがアンケートで確認されたため報告したい。

【方法】

調査時期：X年12月

調査対象：姫路市立保育所・こども園の保育士及び保育教諭（Ⅰ群：クラス担任、Ⅱ群：コーディネーター、Ⅲ群：所長・園長）
調査方法：市こども保育課を通して各所・園にアンケートを送付した。

調査内容：対象者にそれぞれの経験年数を質問した後、上記のⅠ～Ⅲ群ごとに以下の内容について調査した（回答は自由記述及び2件法による）。

- ①Ⅰ群：「コーディネーターに相談したいと思う時」「コーディネーターに相談してよかったこと」
- ②Ⅱ群：「園・所で『気になる子』が支援体制につながる流れ」「コーディネーター設置前後の変化」「コーディネーター研修の有効性」「コーディネーターの役割」
- ③Ⅲ群：「コーディネーター経験の有無」「コーディネーターが果たしている役割」「コーディネーター経験が所長・園長業務に与える影響」「コーディネーター設置前後の変化」
- ④Ⅰ～Ⅲ群：当センターには様々な専門職がいるが、「相談の際に職種を意識するか」「心理士に相談したいのはどんな時か」

【結果】

アンケートはⅠ～Ⅲ群各29名、合計87名に送付し、回収率は100%であった。

①Ⅰ群：クラス担任

経験年数別人数は表1の通りである。クラス担任がコーディネーターに相談したいと思うのは『子どもへの対応』が50%、『発達に関すること』が18%、『こどもの困り感の理解』が14%、『保護者への対応』が

8%であった（図1）。

表1 経験年数別人数（クラス担任）

年数	1～4年	5～9年	10年以上
人数	5名	18名	6名

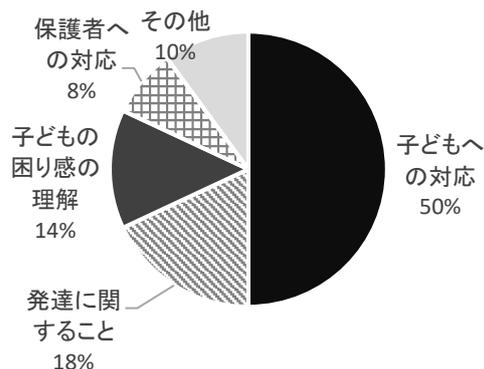


図1 コーディネーターに相談したいと思うこと

経験年数別に分析しても『子どもへの対応』が50%を超え最も高かった。『発達に関すること』は、経験年数1～4年では12.5%、5～9年目で21%、10年以上で14%であった。『子どもの困り感の理解』は、経験年数1～4年では37.5%、5～9年目では14%、10年以上では0%であった。『保護者への対応』については、経験年数1～4年で0%、5～9年で7%、10年以上で14%となった。経験年数が少ないクラス担任ほど子どもの困り感を把握することが難しいと感じていることがうかがえる。一方で、経験年数が上がってくると、保育場面で子どもの気になる様子や困り感を把握することはできるようになっていき、それをどのように保護者に伝えるかということに悩み、そういった場合の相談窓口としてコーディネーターに期待していることが読み取れる。

コーディネーターに相談してよかったこととしては『具体的な支援方法がわかった』が44%で最も多かった。自由記述の中には

「日常の保育を見てもらいながら」「子どもへの対応について具体的に」アドバイスを貰えることがよかったという内容の回答が見られた。次いで、『客観的な意見がもらえた』が20%、『子どもの困り感の理解が進んだ』が11%であった。「担任とは違う視点で子どもを見てもらえること」で、「自分では気づけなかった子どもの思いに気づけた」といった回答が見られた。また、コーディネーターへの相談により「その子どもの別の見方ができるようになった」「1人で悩まずに保育の手立てを考えられるようになった」など『自分自身が変わった』という回答も9%あった。その他には、「親身に話を聞いてもらえた」という回答や実際の保育で担任と子どもとの間に入ってもらう関係を築いてもらえたことや、クラス運営のサポートをしてもらえたことを挙げる回答もあった（図2）。

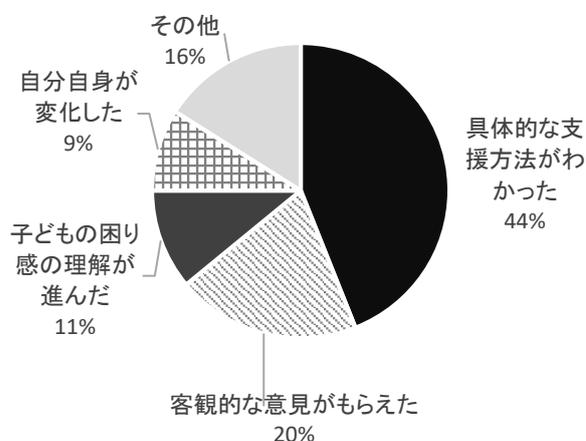


図2 相談してよかったこと

② II群：コーディネーター

経験年数別人数は表2の通りである。

『気になる子』が支援体制につながる流れとしては、支援体制につながるということを所・園内での支援と考えるか、他機関へつながるところまでと考えるかで回答に違いが見られた。所・園内で支援体制につ

ながる流れとしては、『担任からの相談』や『ケース会議』『職員会議』をきっかけに支援体制につながるとした回答が多く、日常的に所・園内で子どもについて相談できる体制が構築されていることがうかがえる。更にそこから改めて対象児について所・園内で複数の視点で観察をして支援の必要性・方向性を検討するという回答や、必要に応じた巡回相談の利用、個別支援計画の作成をするという回答もあった。また、それらの流れを踏まえて保護者とどのように子どものことについて共有するかを所・園内で検討するという回答もあった。

表2 年齢別経験年数(コーディネーター)

年数	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
人数	7名	7名	4名	4名	5名	2名

次に、コーディネーター研修については97%が「役立つ」と回答した。コーディネーター設置前後の変化としては、子どもへの理解や支援方法の変化、職員の意識やケース会議の持ち方の変化を挙げる回答がそれぞれ40%近くあった(図3)。その他の回答としては、「気になる子どもへの支援は皆で考えていくので、コーディネーター設置前後で特に変わったと感じられない」といったものや、コーディネーターがクラス担任もしている場合に、「他のクラスの子どもの様子を見たり担任の相談にのったりすることができないのが現状で、課題と感ずる」といったものがあった。

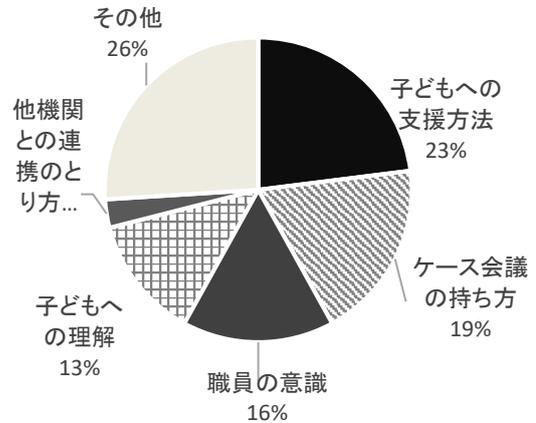


図3 コーディネーター設置前後の変化

次に、コーディネーター研修はどのように役立っているかという質問に対しては、「現場研修で1人の子どもをじっくりと観察し、多職種で意見を交換することで子どもの姿を読み取る力がついた」「コーディネーター会議が情報交換の場として役立った」など、研修がコーディネーター自身の学びにつながったという回答が50%を超えた(図4)。

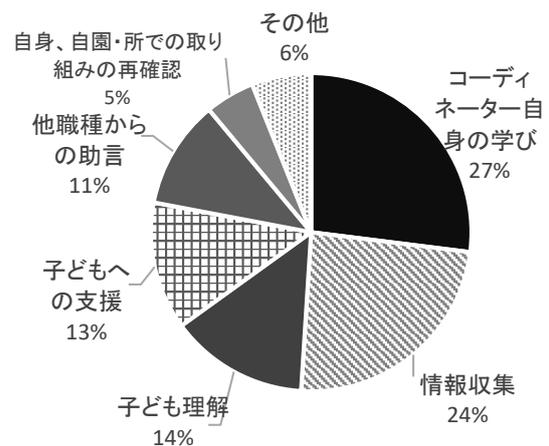


図4 コーディネーター研修はどのように役立っているか

③ Ⅲ群：所・園長

経験年数別人数は表3の通りである。

29名のうちコーディネーター経験があると答えた18名に対してコーディネーター経験が所長・園長業務に与える影響を尋ねたところ、『子どもへの関わり』が32%、『保護者支援』が20%で、利用者への支援に影響を与えたという回答が50%を超えた(図5)。次いでコーディネーターや担任等への関わり、組織運営という回答が多かった。コーディネーターとしての経験は管理職として担任やコーディネーター、そして組織全体を後方支援していくことにも役立っていると言える。

表3 経験年数別人数(所・園長)

年数	1～4年	5～9年	10年以上
人数	16名	9名	4名

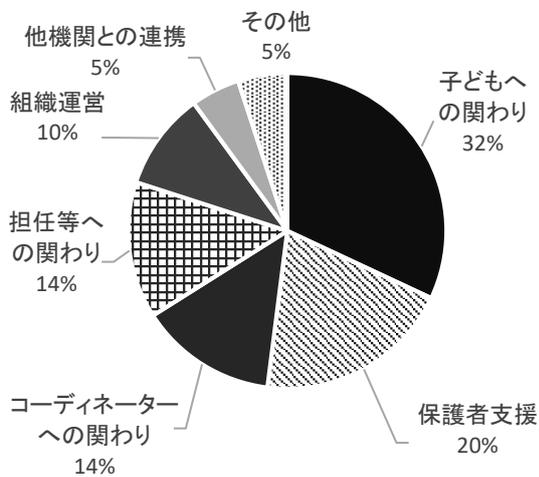


図5 コーディネーター経験が所長・園長業務に与える影響

次に、コーディネーター設置前後の変化としては、『職員の意識』が39%で最も多かった。コーディネーター経験の有無に関係なく、「1人の子どもに焦点を当てて語り合うことが増えた」「『大人が困っている』ではなく『子どもが困っている』という見

方が職場内に浸透しつつある」など、コーディネーター設置前後の変化として「職員の意識の変化」を挙げた割合が最も高かった(図6)。

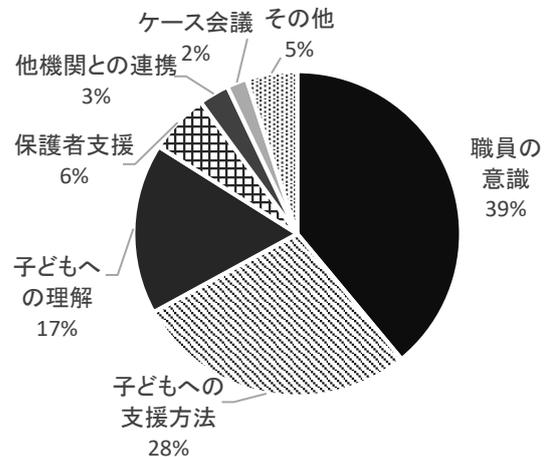


図6 コーディネーター設置前後の変化

次にコーディネーターが果たしている役割については図7の通りであり、コーディネーターは担任、子ども、保護者支援のどの部分でも核となっていることがわかる。また、ケース会議の運営や書類作成の援助なども担っており、コーディネーターに求められる役割は多岐にわたっている。

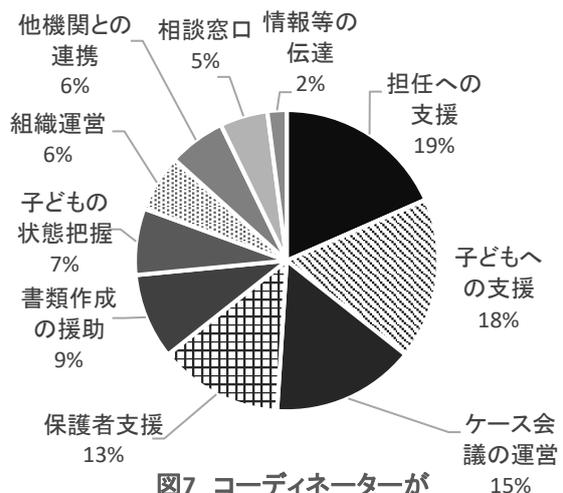


図7 コーディネーターが果たしている役割

③ I～III群共通の質問

相談する際に職種を意識するかという質問に対しては、Ⅰ群で41%、Ⅱ群で65%、Ⅲ群で93%、全体では67%が『意識する』と答えた。

次に、相談する際に職種を『意識する』と回答した人に、心理士に相談したいのはどんな時かと尋ねたところ、『子どもへの対応に迷った時』『子どもの困り感が掴みきれない時』『保護者支援に迷った時』『子どもの発達状況が知りたい時』『自身・所内での見立てに迷いがある時』『専門的な支援の必要性の判断をしてほしい時』『他機関との連携方法が知りたい時』の順でニーズがあることが明らかになった(図8)。

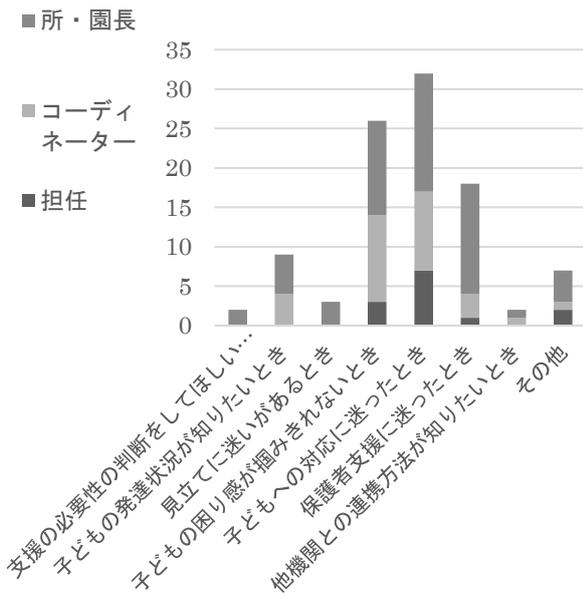


図8 心理士に相談したいと思うのはどんなときか

ここからは、更にアンケートの自由記述の内容も交えて結果を見ていきたい。『子どもへの対応に迷った時』に分類される回答を見ると、Ⅰ群においては「友だちの表情が読み取りにくい」「感情のコントロールが難しい」「気持ちの切り替えが難しい」子どもへの対応、Ⅱ群においては「発達の遅れ／

言葉の遅れが著しい」「感情コントロールが難しい」「コミュニケーションが難しい」「対人関係がうまくいかない」子どもへの対応や「自分の中の援助方法では限界を感じた時」という回答があった。Ⅲ群においては「こだわりやパニック」への対応といった具体的なものに加えて、「先を見通してポイントとなることや対応を相談したい時」、「虐待の疑いがある子どもで感情コントロールや対人関係に課題がある時」という回答があった。次に、『子どもの困り感が掴みきれない時』に分類される回答の自由記述を見ると、「子どもがどのような思いでその行動をとっているのか知りたい時」「子どもの思いが十分にくみ取れていないと感じ、本当の困り感が知りたい時」といった回答が見られた。『保護者支援に迷った時』については、保護者との関係構築、アプローチの方法や子どものことを保護者に伝えるにあたり考えを整理し確認するために心理士に相談したいという記述があった。

Ⅰ、Ⅱ群において「意識しない」と回答した中には、「どの職種がどの分野に精通しているかなどもっと詳しく知りたい」「どの状態、どんな様子の時に誰に何を相談するのが良いか、どんな専門職がいるのかよくわかっていない」というものがあった。一方で『意識する』という回答の中にも「まずは心理士に相談し、そこから子どもにあった職種に相談する」という記述があった。これらの結果から、心理士に対しては子どもや保護者への対応方法についての相談、子どものアセスメント、保育者への助言など様々なニーズがあることが明らかになった。

【考察】

① コーディネーターの設置及びコーディネーター研修実施による変化

コーディネーターの設置により、所・園

内で日頃から子どもについて語り合う風土が形成されてきていると考えられる。そのため職員の意識や所・園内の相談体制に変化が生じ、所・園全体で子どもを支援する「チーム」としてまず自分たちで取り組むという体制が構築されつつある。それにはコーディネーターの役割が大きい。一方で所・園によってはクラス担任とコーディネーター業務を兼務しているところもあり、兼務による課題があることは結果に記載の通りである。

次に、コーディネーター研修は、現場研修（公開保育）はもとよりコーディネーター会議も各施設での実践報告や支援のアイデアグッズを持ち寄った情報交換、グループワークを行うという参加型研修を主としている。聴講型研修に比べると公開保育の担当所・園や参加者の事前準備が必要となり負担は大きいと思われるが、そういった事前準備も含めて日頃の実践を振り返る良い機会になっているのではないと思われる。公開保育は「実践力の向上に役立つと言われる省察を独りではなく協働で行うことができる」「現象である保育の実態を可視化し、言語化するスキルを向上させることにもつながる」（北野，2016）と言われているが、当市で行っている現場研修は、1人の子どもを観察し、その後のケース会議でそれぞれが捉えた子どもの行動の意味、子どもの思いを言語化するのだが、普段は集団を対象としている保育士・保育教諭が、個にフォーカスを当てて観察することにより、その子どもの行動の意味や思いを読み取る経験をする場となっている。また、保育士・保育教諭・作業療法士・心理士といった多職種が参加し、教える－教えられるという形ではなく、そして、単に子どもが「○△していた」と語るだけではなくそれがどういう意味だったのかを問い、共に考えて言葉にしていくという作業をすることで、

参加者が子どもの姿を細やかに読み取る力は着実についてきていると実感している。そして、こういった子どもの目線に立って子どもの行動を読み取る研修を重ねることは、ハウツーではなく、現場で出会う一人ひとりの子どもやクラスに合わせたオーダーメイドの支援を考えていくことにつながっているのではないか。

以上のように、研修はコーディネーターの研鑽の場として大きな役割を果たしていると思われる。

②心理士が果たす役割について

心理士には、子どものアセスメントや子どもを支援していく上でどのようなことが必要かということや保育士・保育教諭（以下、保育者）と共に考えること、また子どもを支援していく上で保護者とどのように関係を作っていくかといったことなど、様々な事柄への対応が求められている。特に子どもの理解や支援に保育者が行き詰りを感じた時に、別の専門的な視点を持つ心理士に相談して保育のあり方を考えたいと思う保育者は多い。また、アンケートの中には「アドバイスにより子どもの行動面の理解が深まり腑に落ちることが度々ある。今までの関わり方の理由付けを得られる時もある」といった記述もあった。心理士とのやり取りの中で自分の考えの裏付けを得ることで、保育者の自信につながる場合もある。

そういったニーズがある中で、心理士が果たす役割としては、保育者の質問に応えるという一方向的な関わりではなく、子どもの発達を理解を前提とし、子どもの行動の背景を細やかに読み取り、子どもの願いとその後ろにある保護者の願いを想像すること、それを保育者と丁寧にも共有するという、保育者の自立につながる双方向的な支援をすることであると考えられる。

【付記】

今回の調査に際し、アンケート作成から実施まで惜しみない協力をしてくださいました姫路市こども未来局教育保育部こども保育課喜多村幸子係長、藤尾麻紀係長、市立高岡保育所池内栄子所長に心から感謝申し上げます。また、今回のアンケートに快くご協力くださいました保育士・保育教諭の皆様にも心より御礼申し上げます。一つ一つの質問に丁寧に回答していただき本当にありがとうございました。そして、コーディネーター研修を通して様々な気づきの機会を与えてくださった保育所・こども園の先生方、こどもたちに心より感謝申し上げます。

本稿は日本心理臨床学会第 39 回大会で発表したものを加筆・修正したものである。

【参考文献】

- ① 森岡理恵子 (2018) キンダーカウンセリングで発達の視点が生きる 子どもの語りを聴くことについて. 臨床心理学 18-2;198-202 金剛出版
- ② 北野幸子 (2016) 地域一体型による保育の質向上研修の開発－舞鶴市の挑戦. 発達 146;8-13 ミネルヴァ書房
- ③ 大豆生田啓友 (2019) わが国における保育の質の確保・向上の方向性を考える. 発達 158;52-57 ミネルヴァ書房